Osaka University Knowledge Archive

Title	<図書紹介>前田　茂・要真理子著『イメージ（上・下）』
Author(s)	太田, 喬夫
Citation	デザイン理論. 2012, 60, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53412
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

前田　茂・要真理子著
『イメージ（上・下）』

ナカニシヤ出版，（上）2011年，120ページ．（下）2012年，126ページ。

太田喬夫

本書は，さまざまなイメージなるものを読み解き，生み出す能力を身につける教科書として企画された。IT 産業の発達により，われわれの生活および文化・社会では，ますます視覚情報が拡大している。われわれは日々，意図的に流される膨大な視覚情報を無批判に受け入れがちである。心地よいイメージの世界に取り囲まれている。したがって，主体的にイメージ・リテラシーの力を身につける必要に迫られているというわけである。本書は，こうした今日的な視覚情報にとどまらず，古今東西のあらゆる「イメージ」なるものを概観しようとしている。それぞれのイメージの問題を解く理論と歴史を簡単に紹介し，分かりやすいイメージの例を写真や図で具体的に示そうとする。古代から現代に至るまでの，地域的にも多様な広義の芸術・デザイン，したがって伝統的な芸術作品からゲームや信号，地図にいたるさまざまな視覚文化一般に現れた画像，図像，記号，映像などを示しながら，それらの意味，社会的機能を簡潔に明らかにしていこうとしている。

本書は，上巻「イメージとは何か」と下巻「イメージと私たち」の２巻からなる。上巻は「イメージのあり方」，「イメージのテクノロジー」，「イメージの意味」，「組み合わされたイメージ」，「ヴィジョンの育成」，「イメージの分析」の六章からなる。下巻は，「私のイメージ」，「世界のイメージ」，「ステレオタイプ」，「イメージと社会」，「イメージの価値と消費」，「公共のイメージ」の六章からなる。上巻では主に視覚と「イメージ」そのものの意味と機能をめぐる諸問題が，下巻ではイメージの社会的意味と機能をめぐる諸問題が扱われている。各専門領域（美学，哲学，美術史，デザイン，自然科学，精神分析学，心理学，社会学など）での古今東西の文献が紹介されている。

本書は，普通は広過ぎ漠然としており，ことさら意識して反省し，厳密に考えようとはしない「イメージ」なるものの世界をとにかく理論と図版の両方から整理し秩序立てようとしたもので，その点「驚異の書」である。筆者の専門分野のためか，写真・映画・ITとデザイン領域での「イメージ」が比較的多く扱われている気がする。多くの「コラム欄」も当該の「イメージ」の問題の註やエピソードとして設けられており，読者の理解を容易にする配慮が伺われる。さらに巻末には，図版の詳細なデータや人名索引，関連年表が掲載されている。

「あとがき」によれば，本書の出発点は，フランスのリセにおけるイメージ教育の教科書であるジャン＝クロード・フォザ，フランソワーズ・パルフェ，アンヌ＝マリ・ギャラによる『イメージ・リテラシー工場 ── フランスの新しい美術鑑賞法』（犬伏雅一他訳，フィルム・アート社刊）にあるという。筆者は，このフランスの教科書の使い勝手が良いことに注目したが，フランスのイメージ文化を理解していないし，文章の論理展開がフランス流であるので，今の日本の大学生にはとっては読みづらいという。フランスの教科書を日本の大学生にも分かりやすくしようとして本書は出来上がったという。「あとがき」ではまた，「見ること」は多義的で複数

の研究領域を横断する必要が述べられている。専門領域間の隔たりを超えて，さらに専門以外の場にいる立場にいる人がイメージについて互いに議論できる共通基盤を築くために，幅広く表象（イメージ）の問題を扱った基礎知識を提供してくれる教材が必要だと考えたという。

以上述べた筆者の本書の意図については，それなりに理解できる。だがなぜ，今この時期に「イメージ」の教科書なのか。そこにはフランスが今，「イメージ文化リテラシー」教育を必要としていることに共感していることが大きな理由の一つであろう。実際，冒頭に述べたように写真やインターネットといった新たなメディアに対する読み書きが，教育，社会問題として日本でも重視されつつある。また東大のフランスの表象文化論や視覚文化論・視覚文化史といった学際的な表象文化への関心が強くなっていることも関係しているように思う。さらに一般化してみれば，グローバリズム，情報化社会，大衆化といった特色を持つ今日の文化社会のもつ問題点が，本書の背景にあるといえる。「デザイン」の世界も，この点，コミュニケーションの概念とともにイメージ・リテラシーの枠組みで問題となりうるだろう。大学でこの教科書での教育が実際どのようになされ，どんな成果と課題が生まれるのかには興味がある。

イメージの問題は，ベルクソンやメルロ＝ポンティ以降，リオタールやドゥルーズなどに至る現代のフランスの哲学者において，「ロゴス」に対し優位ある仕方で扱われてきたことも，本書の特色と関係があるように思う。「イメージ」は，ロゴスの原理を問う哲学にとっては異質な他者の性格を持っていたが，今日では哲学は，イメージを排除・抑圧はしないでイメージと競い合いイメージの論理をロゴスとの新たな関係さえも模索している。フランスの哲学者たちにとってセザンヌの絵画の画面「イメージ」（本書にも掲載）は，近代における視覚の特権化の代表として，またその多層的構造の読解，たとえば，原初的知覚や純粋視覚，身体と世界の統一あるいは亀裂，それに対応する画面や色彩のタッチの構築性と揺らぎ，そして出来事の好例として哲学の最適な参照物となってきた。

教科書という本書の性格から，「イメージ」の広がりと比べてその本質に収斂する方向が弱いことは否定できない。伝統的な芸術作品と非常口の標識とを同じ「イメージ」という語で結びつけることには抵抗がある。それ以上に気になるのは，本書で扱っている学的な意味合いを持つ「イメージ」という概念と日常，日本語で考える「イメージ」とのギャップである。日常語の「イメージ」の意味は，評者にとっては，見栄えを取り繕い，真実を覆い隠し，人々の心を惑わすものとして，あるいは人々にモノを消費させる広告宣伝のひとつの戦略として，皮相な，あるいはネガティヴな特質を持つものとして捉えがちである。「イメージアップ」という和製英語に見られるように，周囲や世間を気にし表面的印象をよくするといった意味でとらえがちである。その上，評者にとって，「イメージ」は視覚文化や造形作品より，文学や音楽において想像力で生み出されるものと考える方が自然である。「イメージ」という語にはこのように違和感もあるが，それ以上に今日の視覚文化の「イメージ・リテラシー」の重要さは，グローバルに認めねばならない。「イメージ」のもつ功罪や限界を知ることも本書の狙いの一つである。われわれは，「イメージ」なる言葉を用いるときは，どういう意味を込めて使うのかを確認する必要がある。